

「エン・クリスト」37号

光のある間に

1989年1月発行

本日は「小池辰雄著作集全十巻完結記念・聖書講演会」ということでありますが、このように多数の方々がこの講演会に來会されましたことを心から嬉しく思い感謝いたしております。

小池先生が著作集全十巻を通して告白されていること、それを要約するならば、それは、聖書の中に秘められた神の呻き^{うめ}——これは神さまの呻きであり、私達一人ひとりに対する深い愛の呻きであります——これを先生は自らの呻きとして告白しておられるのだということが出来ます。先生は聖書を読むことを次のように言っておられます。聖書はヘブライ語（旧約）・ギリシャ語（新約）で書かれたものだが、ヘブライ語・ギリシャ語ができればそれで聖書がわかるというものではない。ヘブライ語・ギリシャ語の奥にある、神の根源語に聴き入ることだ、その響きを受けとることだ、と。詩篇の第19篇に、

「語らず言わず、その声きこえずるに、その響きは全地にあまねく、その言^{ことば}は地の極にまで及ぶ^{はて}」

とあります。先生は神の根源語の響きを聴いておられる、その響きの中に身を投じておられる。そのとき先生は、主の前に、十字架において自分が無罪・無私とされてあるという絶対恩寵の根源現実を全身で深く受けとっておられるのです。そして、そこに臨み来る聖霊が神の根源語の響きを受けとらせるのだ、と告白しておられます。聖書は神の霊によつて書かれたものですから、読む側においても神の霊の導きが必要といたします。ヨハネの第一の手紙では、

「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油（＝聖霊）がとどまつているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたに教える。」（ヨハネ一2・27）

と書いてあります。こういうわけで先生は、いよいよ深く聖霊にとらえられ導かれて、聖書の現実を体感し告白されるようになった、その結晶が著作集全十巻であるということが出来ます。とりわけ私は今回の第十巻『聖書は大ドラマである』に大きな期待を寄せております。というのは、膨大な旧・新約聖書、ことに旧約聖書は我々日本人にとっては取っつきにくい書であります。それをわかり易く、そのエッセンスを示して下さり、よき道しるべを与えているのがこの第十巻であるからです。これを助けとし拠りどころとして私達は、旧約聖書の森の中へ楽しく分け入って行くことが出来るであります。



旧約聖書は、歴史の部分（イスラエル民族の）や律法、預言書、詩篇（讃美と祈り）、さらには文学的作品（ヨブ記、伝道の書など）など様々の内容のものから成っていますが、その全体が、神からの人間に対する呼びかけ、語りかけの書であるということが出来ます。キリストは、

「この書〔旧約〕は我につきて証するものなり」（ヨハネ5・39）
と言われました。また、復活の主は、弟子たちに、

「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ24・27）

とあります。新約聖書では、御子キリストは、ロゴス・キリスト（言霊なるキリスト）の受肉体——神から遣わされた生ける生命の言——としてとらえられています（ヨハネ1・1～18参照）。

「この言に生命があつた」

と。だからイエス・キリストの存在そのものが私達への語りかけであります。

「恵みと真理に満ちていた」

このイエスの存在が、即、言であり、語りかけであります。イエスの発せられた言葉やなされた行為は、その躍動体にほかなりません。

今、私の心からの願いは、聖書をわれわれの同胞が、日本民族が、ほんとうに「心の糧」として吸収してほしい、そのために真剣に聖書に取り組んでほしい、ということです。とかく聖書というと、あれはキリスト教徒の教典だ、クリスチャンだけの読むものだという先入観ないしは誤解があります。こういった先入観から解き放たれて虚心に聖書に読み入ってほしい。神は無色透明なるお方、愛そのものなるお方です。これを最も鮮かに的確に示してくださったのがキリストであります。新約聖書の中のキリストの言の中で最も感動的なものの一つは、あの「山上の垂訓」の一節、

「天の父は、その日を悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり……さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ」（マタイ伝5・45～48）
であり、また、

「空の鳥を見よ、野の花を見よ、天の父は彼らを養つてあり給う。まして汝らをや。まず、神の国と神の義とを求めよ、さらば、すべて必要なものは添えて与えられるべし」（マタイ伝6・25～34の要約）

とさとされた箇所であります。何たる深い神信頼か、無限無量の絶対愛か！キリストは、人の善悪や民族の違いによって人を分け隔てなさらない。その点においても「旧約」の限界を完全に突き抜けておられます。

旧約聖書を読んで感心することは、イスラエル民族のあり方です。彼らにとつては、神



さまと取っ組むことが民族の生き甲斐であつた。民族としての最大の関心事は、「ヤーウエーの神」として自らを現わした神とイスラエルの民族とが常に正しい関係にあることであつた。この神の御心みこころを求め、これに従うことであつた。という点であります。目に見えない神、言をもつて語りかけ給う神、このような神と取っ組んで貫いてきたところに民族としての偉大さがあると思う。それに対して日本を思うとき、日本はいろんな面で優れた民であるが、残念なことにはただ一つを欠く。それは聖書を受け入れようとしないうことです。日本は明治以降、西欧のすぐれた文物ぶんぶつを受容しました。しかし、その源にある聖書は受け入れませんでした。

さて、今日の演題は「光のある間に」ですが、これはヨハネ伝第12章の次の箇所からとりました。

「イエスは言われた。『光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、

光を信じなさい』」（ヨハネ12・35～36）

この御言を通して申し上げたいことは、第一に、イエス・キリストという「光」が輝いている間にこの光を受けとつてほしいということです。第二に、あなたの人生がなお「光」の中にある間に、すなわち「死」という暗闇がやってこない間にキリストなる光を受けとつてほしいということです（伝道の書12・1～2参照）。第三に、これは個人的な願いかも知れませんが、小池先生が地上にいらつしやる間に、先生を通してまことの光を受けとつてほしいのです。その意味からも、皆様が御来会下さったことを心から感謝申し上げます。



「エン・クリスト」第 39 号 創世記（第 7 回）
アブラハムの生涯（4）——イサクの結婚——

1989 年 7 月発行

最愛の独り子イサクを献げよとの神の命に敢然として従い、神の与え給うた最大の試練に勝利したアブラハムはその後、神の豊かな祝福の中に晩年を過ごした。ただ一つの大きな悲しみは愛する妻サラと死別したことであった。サラの生涯は 127 年であった。

「アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ」（創 23・2）

アブラハムはヘトの人々に墓地の分譲を頼み、ヘト人エフロンからヘブロン
の近くのマクペラにある畑と洞穴を銀四百シケルで買い取り、サラをその
畑の洞穴に葬った」（創 23・3～19）

さて、サラを天界に送り、地上に残された老境のアブラハムにとっての最後の仕事は、息子イサクのために嫁を選ぶことであった。創世記第 24 章では、アブラハムがどのような思いでイサクのための嫁選びに当たったかが記されている。そこにアブラハムの神への忠実と信頼のすがたをみることができる。また、アブラハムの命に従ってはるばるアブラハムの故郷アラム・ナハライムのハランへと旅立って行った僕のすばらしい忠誠のすがたを。ここに煩^{はん}をいとわず、聖書から引用しよう。

「アブラハムは家の全財産を任せている年寄りの僕に言った。『手を私の腿^{もも}の間に入れ、天の神、地の神である主にかけて誓いなさい。あなたはわたしの息子の嫁をわたしが今住んでいるカナンの娘から取るのではなく、わたしの一族のいる故郷へ行つて、嫁を息子イサクのために連れて来るように。』」（創 24・2～4）

カナンは異教の地である。主なる神に対する信仰の純粋性を保持するためには、カナンの地の娘ではなく、アブラハムの故郷から嫁を迎えなければならぬ、と確信したのである。出発点において第一步を誤るならば、あとあとまで歪^{ゆが}んでくる。イサクのための嫁選びという人生の重大事に対処するにあたり、アブラハムは先ず神を第一とした。主の御旨を重んじ、主の御力により頼んでなそうとした。右に引用した言の中に、アブラハムのそのような思いと深い祈りをみる。

「僕は尋ねた。『もしかすると、その娘がわたしに従ってこの土地へ来たくないと申すかも知れません。その場合には、御子息をあなたの故郷にお連れしてよいでしょうか。』アブラハムは答えた。『決して、息子をあちらへ行かせてはならない。天の神である主は、わたしを父の家、生まれた故郷から連れ



出し、「あなたの子孫にこの土地を与える」と言つて、わたしに誓い、約束してくださつた。その方がお前の行く手に御使を遣わして、そこから息子に嫁を連れて来ることができるようにしてください。……」(創 24・5～8)

何たる深い神信頼のアブラハムであることか！ この主人の言葉に老僕はアーメンをもつて答えた。主人からの多くの高価な贈り物を携えて出立した僕は、漸く目指す町へと近づいた。そこで第一に彼のなした事は何か。祈りであつた。

「女たちが水くみに来る夕方、彼は、らくだを町外れの井戸の傍らに休ませて、祈つた。

『主人アブラハムの神、主よ。どうか、今日、わたしを顧みて、主人アブラハムに慈しみを示してください。わたしは今、御覧のように、泉の傍らに立っています。この町に住む人の娘たちが水をくみに来たとき、その一人に、「どうか水がめを傾けて、飲ませてください」と頼んでみます。その娘が、「どうぞ、お飲みください。らくだにも飲ませてあげましょう」と答えれば、彼女こそ、あなたがあなたの僕イサクの嫁としてお決めたものときさせてください。そのことによつてわたしは、あなたが主人に慈しみを示されたのを知るでしょう。』」(創 24・11～14)

この老僕の祈りには心打たれる。主人に対する忠誠心あふれる祈りである。さらにこの僕は、イサクの妻としてふさわしい女性の第一の条件を、思い遣りの深さ、心の優しさに求めている。彼は、美貌の女性を与え給えとは祈らなかつた。内面の美しさ、気高さを備えた娘をと祈つた。見知らぬ旅人に、そして十頭ものらくだにも労を厭わず、快く水を汲み飲ませてくれる心優しき乙女を求めた。するとどうだろう。

「僕がまだ祈り終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せてやつて来た。彼女は、アブラハムの兄弟ナホルとその妻ミルカの息子ベトエルの娘で、際立つて美しく、男を知らない処女であつた」(創 24・15～16)

とある。もちろん、僕は彼女の名前も素性も知らないのだが。

「彼女が泉に下りて行き、水がめに水を満たして上がつて来ると、僕は駆け寄り、彼女に向かい合つて語りかけた。『水がめの水を少し飲ませてください』。すると彼女は、『どうぞ、お飲みください』と答え、すぐに水がめを下ろして手に抱え、彼に飲ませた。彼が飲み終わると、彼女は、「らくだにも水をくんで来て、たっぷり飲ませてあげましょう」と言いながら、すぐにかめの水を水槽に空け、また水をくみに井戸に走つて行つた。こうして、彼女はすべてのらくだに水をくんでやつた。その間、僕は主がこの旅の目的をかなえてくださるかどうかを知ろうとして、黙つて彼女を見つめていた。」(創 24・16～21)



実に生き生きと絵画的に情景が描かれている。かいがいしく働く乙女の姿と、緊張の面持ちでじつと見つめている僕の思い^{しもべ}。やがて娘の口から、彼女がナホルとその妻ミルカの子ベトエルの娘であると聞き知って僕は感謝に溢れ、ひざまずいて祈った。

「主の慈しみとまことはわたしの主人を離れず、主はわたしの旅路を導き、主

人の一族の家にたどりつかせてくださいました」(創24・27)

と。彼はこのようにして、期せずして、主人アブラハムの親族の娘リベカに出会った。そしてこの娘こそ、心優しく思い遣り深い、まさに祈り求めていたその人であつたと確信した。祈りはかなえられたのである。リベカの兄ラバンによって家に迎えられ、もてなしの食事が僕の前に並べられた。しかし、その人は言った。

「用件をお話しするまでは食事をいただくわけにはまいりません」(創24・33)

と。ここにも僕の、主人アブラハムに対する忠実な態度がにじみ出ている。自分に託された使命を果たし終えるまでは、くつろぐわけにはまいりません、との並々ならぬ決意がうかがえる。

「どうぞお話し下さい」

とラバンが答えると、その人は語りはじめた、といって聖書が記している内容は、アブラハムがどういう人であるか、今アブラハムの一家はどういう状況にあるかを語ったあと、僕にアブラハムの命じた内容を旅立ちから泉のほとりの出来事に至るまでを、誠実に正確に語っている。読者は記事の繰り返しと思うかも知れない。しかし、この繰り返しは、僕がいかに忠実に自己の主観的判断を交えずに主人の言葉と泉のかたわらでの祈り、それにづく情景を伝えているかを我々に示しているのである。私達がキリストの僕として世に對するときにも、このアブラハムの僕の相^{すがた}をこそ学びとるべきである。

語りつつ僕は次のように結んだ。

「主は、主人の子息のために、ほかならぬ主人の一族のお嬢さまを迎えることができるように、わたしの旅路をまことをもって導いてくださいました。あなたがたが、今、わたしの主人に慈しみとまことを示してくださいさるおつもりならば、そうおっしゃってください。そうでなければ、そうとおっしゃってください。それによつてわたしは進退を決めたいと存じます」(創24・48～49)

これに対して、ラバンとベトエルは答えた。

「このことは主の御意志ですから、わたしどもが善し悪しを申すことはできません。リベカはここにおります。主がお決めたこととおおり、御主人の御子息の妻になさってください」(創24・50～51)

このラバンとベトエルの言葉もまた立派ではないか。

「主の御意志ですから…、主がお決めたこととおおり…」

と言つて御旨^{みむね}に従おうとしているのである。翌朝、僕はすぐにも主人のところへ帰らせて



ほしいと申し出た。リベカの兄と母は、さすがに娘をかくも突然に手離すに忍びず、十日ほど待つてほしいと言ったが、リベカははつきりと

「この人と一緒に行きます」

と躊躇なく答えた。兄たちは旅立つリベカを祝福して言った。

「わたしたちの妹よ、あなたが幾千万の民となるように。あなたの子孫が敵の門を勝ち取るように」（創 24・60）

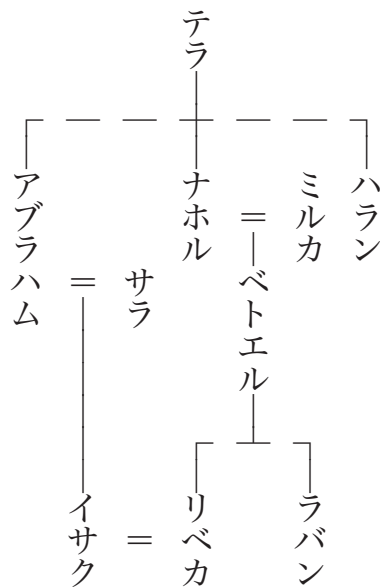
こうして僕は神の導きのもと旅の目的を果たし、リベカを連れて帰途についた。イサクはリベカを迎えて妻とし、リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た（創 24・67）。結婚は人生の重大事である。キリスト者たる私達は、私達の人生を主に献げ、主の御旨にかなう生涯を歩みたいと願う。同様に、結婚ということも、愛する者同士の場合においては、神の御旨が成り、主がよろこび給う結婚であり、結婚生活でありたいと願う。そのためには、結婚生活においても、

「まず、神の国と神の義とを求めよ」（マタイ伝 6・33）

とのキリストの御言を第一とし、夫婦が心を一つにして主キリストの前にひざまずき、祈ることが生活の根底であつてほしい。この最も大切な点において一致できるひとを妻として夫として選んでほしい。

「我はまことの葡萄の樹、汝らは枝なり。汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。我に居れ、さらば我なんじらに居らん。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。汝ら我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望にしたがいて求めよ、さらば成らん。なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし。父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ！」（ヨハネ伝 15・1～9（抄））

このキリストの愛の御言を家庭生活の柱とし、助け主、聖霊なる主様がいつも家庭の中にご臨在下さいますようにと祈りつつ、筆を擱きます。



「エン・クリスト」第40号 創世記（第8回） エサウとヤコブ

1989年10月発行

今回学ぶところは創世記第25章と第27章である。

さて、アブラハムはサラと死別した後、再び妻をめとった。その名をケトラといった。彼女はアブラハムとの間に6人の子供を産んだ。アブラハムの生涯は175年であった。

「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。息子のイサクとイシュマエルは、マクペラの洞穴に彼を葬った」（創25・8～9）

すなわち、妻サラの墓地に共に葬られたのである。

「アブラハムが死んだ後、神は息子のイサクを祝福された。イサクは、ベエル・ラハイ・ロイの近くに住んだ」（創25・11）

ベエル・ラハイ・ロイは死海の南端から南南西に約120キロメートルの地点。かつて神がサラの侍女ハガルを顧みられた所である（創16・7～14）。

ところでイサクとリベカが結婚した後、夫妻には20年近くもの間、子供が与えられなかった。結婚した時イサクは40歳だったから、彼は既に60歳に近かった。

「イサクは、妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った。その祈り

は主に聞き入れられ、妻リベカは身ごもった。」（創25・21）

事も無げに記されているけれども、この短い叙述の中にイサクの苦悩と深い祈りを見る思いがする。彼がまだ少年の頃、父アブラハムは神の命に従ってモリヤの山で彼を燔祭はんさいとして献げた。

「祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の蒔の上に載せた」

そして、刃物を取り、危うく息子を屠ほふるところだった。そのとき主の御使いの声があった。

「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったのだ、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう」（創22章）

この時の体験をイサクは決して忘れえなかったであろう。そして、父に対する

「子孫を天の星のように、海辺の砂のように」

との主の約束を我が身に刻み込んでいたことであろう。それだけに「約束の成就」を待望しつしょうりよつ、焦慮や疑念に悩んだかも知れないのだ。

「妻のために祈った。」



この短い一句を大切に心にとめよう。神は「約束」を通して信仰を与え、忍耐（忍待）を学ばせ、信仰を鍛練し給う。それは絶えざる祈りへとその人を導く。イサクの祈りは聞き入れられ、妻リベカは身ごもった。ところが、何と、リベカの胎内には双子が宿ったのである。

「リベカは、胎内で子供たちが押し合うので、『これではわたしはどうなるのでしょうか』と言って、主の御心を尋ねるために出かけた」（創 25・22）

ベエル・ラハイ・ロイの井戸か、ベエル・シェバか（フランシスコ会・創世記の注解）、出かけた所は記されていないが、リベカが主に祈り、御意を求めたこと、それが重要である。

「主は彼女に言われた。『二つの国民があなたの胎内に宿っており、二つの民があなたの腹の内に分かれて争っている。一つの民が他の民より強くなり、兄が弟に仕えるようになる。』」

月が満ちて出産の時が来ると、胎内にはまさしく双子がいた。先に出て来た子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。その後で弟が出て来たが、その手がエサウのかかと（アケブ）をつかんでいたの
で、ヤコブと名付けた。リベカが二人を産んだとき、イサクは六十歳であった。」

（創 25・23～26）

パウロは自分が神の召命を受けたことにつき、

「母の胎を出でしより我を選び別ち、その恩恵をもつて召し給うた」

と告白しているが（ガラテヤ書 1・15）、エサウ（兄）とヤコブ（弟）の兄弟は、既に母の胎内にあるときに、その運命は神によつて定められていたのだ。パウロはこの箇所を引いて、

「その子いまだ生まれず、善も悪もなき間に、神の選びの御旨は動かず、行為によらず召すものによらん為に『兄は弟に事うべし』とリベカに宣えり」

と言っている（ロマ書 9・11～12）。いったい、人間の生き方と神の予めの定め、この両者はいかに関わるのだろうか。すべてが予め定められていて、その運命から逃れられないとすれば、人間の努力も精進も空しいではないか。よい運命を約束された者はよいが、そうでない者にとっては、生き甲斐や喜びはどこにあるのだろうか。

「そは神には偏り視給うこと無ければなり」（ロマ書 2・11）

とあるが、エサウとヤコブについてはどうなっているのか。
さて、

「二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人で野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩の獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した。」（創

25・27～28）

どこの家庭にも見られそうな光景である。どうも、事子供に関しては、父イサクは凡備であるのに対し、母リベカは洞察力を備えた賢婦人のように思われる。イサクは自分の好



みからエサウを愛したのだが、リベカは「神の民」の将来を思つてヤコブを愛し期待をかけた、そんな風に思えるのである。

自然の順序からすれば長男が家督を相続する。双子でありながら、エサウが先に出て来たという偶然の事情で、エサウは長子の特権を生まれながらに保有し、ヤコブはそれにあずかることができない。長ずるにつれてヤコブはその口惜^{くや}しさを次第に強く意識することになったのであろう。ヤコブは、「押しつける者」という意味の名前(ヤコブ)のとおり、執着心が強く、一度び「これを」と目標を定めると、それを手に入れるまでは決してあきらめないひたむきさを備えていた。兄エサウの有する「長子の特権」、それはヤコブにとつてまぶしいほどに輝やかしく、貴重なものであつた。しかも自分はそれにあずかれないのだつた。何とか手に入れることはできないものか。ヤコブはじつと機会を待つていたのであろう。期せずしてその時が来た。

「ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきつて野原から帰つて来た。エサウはヤコブに言った。『お願いだ。その赤いもの(アドム)、その赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきつているんだ』

彼が名をアドムとも呼ばれたのはこのためである。ヤコブは言った。

『まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください』

『ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい』

とエサウが答えると、ヤコブは言った。

『では、今すぐ誓ってください』

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去つていった。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。」(創 25・29～34)

通常の下況下では、エサウが「長子の特権」を譲るはずがない。極度の疲労と空腹のため、思考力・判断力が低下しているその時をつかまえて、ヤコブは一杯のスープをもつて兄から「長子の特権」を譲り受けてしまったのである。相手方の窮迫^{きうぱく}状況につけ込んで暴利をむさぼる行為は、現代の法観からすれば非難に値し、その取引は「無効」である。また、そもそも「長子の特権」を父イサクの承諾もなく兄弟の間で勝手に譲つたりできるものなのだろうか。ともあれ、ヤコブはエサウに誓わせて、長子の権利(特権)を譲り受けた。長子の権利とは、

「家族の家長となる栄誉であり、遺産の分配で他の者の二倍をうけ(申命記 21・17)、宗教上の祝福と特権をも含んでいた(創 27・27～29、49・8)」(『旧約聖書略解』40 頁)。
さて、

「エサウは、四十歳のときヘト人ベエリの娘ユディトとヘト人エロンの娘バセマトを妻として悩みの種となった。」(創 26・34～35)



エサウが40歳のときといえば、イサクは既に百歳に達している。それからどれほど後かは定かでないが、老齢のイサクがエサウを祝福しようとする場面が描かれている(創27章)。この機会にヤコブは、こん度は父の祝福をエサウから奪い取ってしまうのである。

「イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこでエサウを呼び寄せて、言った。

『こんな年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、

私自身の祝福をお前に与えたい。』(創27・1～4)

これを聞いたリベカは、これは一大事、もしイサクがエサウに「祝福」を与えるならば、愛するヤコブは浮かび上がれなくなってしまうと考え、策略を用いて父の「祝福」をヤコブに得させようとする。すなわち、ヤコブに命じて家畜の群の中からよく肥えた子山羊2匹を取ってこさせ、彼女自らおいしい料理を作り、ヤコブにそれを父のところへ持って行かせようと。この計画には、さすがのヤコブもたじろいで母に言った。

「エサウは毛深いのに、自分の肌は滑らかなです。父が触れば、すぐに看破られ、わたしは祝福どころか、呪いを受けます。」

しかし、リベカは決然として言った。

「母の私とその呪いを引き受けます。お前は私の言うとおりにしなさい。」

そして、家にしまっておいたエサウの晴れ着を取り出してヤコブに着せ、子山羊の毛皮を彼の腕や首に巻きつけて変装させ、父のところへ料理をもって行かせたのである。父はヤコブの呼びかけの声に不審をいだきつつも、腕に触れば毛深くエサウのようであったから、遂に見破ることができず、ヤコブをエサウと誤信して、ヤコブを祝福して言った。

「ああ、わたしの子の香りは主が祝福された野の香りのようだ。どうか、神が天の露と地の産み出す豊かなもの、穀物とぶどう酒をお前に与えてくださるように。多くの民がお前に仕え、多くの国民がお前にひれ伏す。お前は兄弟たちの主人となり、母の子らもお前にひれ伏す。お前を呪う者は呪われ、お前を祝福する者は、祝福されるように。」(創27・27～29)

こうしてヤコブは、本来、兄エサウに帰すべき「祝福」をも奪い取ってしまった。エサウが狩りから帰って父のところへ来たときは、もう手遅れであった。父思いのエサウが心をこめて作ったおいしい料理は、もはや何の価値もなかった。エサウは

「非痛な叫びをあげて激しく泣き」

父に祝福を求めたが空しかった。父子ともに、リベカとヤコブに欺かれてしまったのである。欺きによるものにせよ、神の前に誓って行なった「祝福」は、もはや、やり直しのきかないものだったのである。



エサウとヤコブのこの物語は、われわれには躓きの石である。と同時に、神の深い摂理が隠されているようである。われわれの道德観念からすれば、一杯のスープをもって「長子の特権」を手中に収めたヤコブの行為といい、更に、リベカが夫イサクを欺き、息子ヤコブをして父を欺かしめる、「祝福」騙取の仕業にいたっては、目的のためには手段を選ばぬ非道德的・非人間的な行動であり、到底是認しえないところとの感を抱かしめる。じじつ、注解書においては、リベカの策略を激しく非難し、また、母の命令に唯唯諾諾と従ったヤコブの主体性の無さ、弱さを酷評しているが(例、『旧約聖書略解』41頁参照)、はたして、そう単純に割り切つてよいものだろうか。私にはそうは思えない。

リベカの胎内で双子が押し合つたとき、彼女は折つて主の御心を求めたのである。そのとき、主は、はつきりと

「兄が弟に仕えるようになる」

と仰せになったのだ。弟ヤコブが「神の民」の靈統を嗣ぐ正統であるべきだ、との思いは、リベカの心から離れなかつたに違いない。夫イサクはそのことには全く気付いていない。意を用いようとしな。鹿の料理を食べさせてくれるというのでエサウを愛しているのだ。非常手段を用いることもやむを得ないのではないか。

「呪いは私が引き受けます」

と決然と言いつたリベカの言葉に、私は、私情を超えたりベカの決意を汲み取るのである。「神の国」の民たること、「神の国」を受け嗣ぐ者は、生まれながらの、形式上の「相続人」であつてはならない。彼がどれだけ「神の国」を尊び、それを何ものにも替え難い「宝」と自覚しているか、それが問題なのである。ヤコブは「肉」(自然の順序)においては、無資格者である。神の民たりえない者である。しかし、彼は、神の民たることを熱望した。ひたむきだった。神の御計画は、無資格者をして

「志望をたてしめ」(ピリピ書 2・13)

恩恵をもつてそれを得しめ給うのである。皮肉なことに、エサウとヤコブの姿は、後の歴史における「イスラエル民族」(神の選民)と異邦人の姿の予表となつていていることである。すなわち、本来の選びの民たるイスラエル民族がキリストに躓き(それは自己義認の故だが)、無資格者たる我ら異邦人にキリストの恩恵が与えられ、キリストの恩恵の故に、何の功績もなくして、神の国を受け嗣ぐ者とされたのである。そのことは、ロマ書やエペソ書において明らかに示されている。だからといって、イスラエルが恩恵の外にとどまつてよいはずがない。ロマ書第 9 章、第 11 章のパウロの熱き思い——イスラエルの救われんことを！——との祈りは、切々と胸に迫る。



「エン・クリスト」41号 新しき年を迎えて

1990年1月発行

顧みれば今より18年前、それまで所属していた群れを離れ、1972年1月1日を期して独りで新しい出発を始めた時、私の心にあったのは、小池辰雄先生の体得された「福音」を寸分のズレなく正しく継承したいとの願いだけであった。その為には、まず「吸収すること」に全力を傾注すべきであり、その他の事は後に自ずと示され解決されるであろう、と考えた。それから18年、今や時が満ちつつあるような思いをいだいている。福音書やパウロ、ヨハネ、ペテロらの書簡の内容の深さ、広さ、高さが実感されるようになって来た。キリストの言、聖書の言は、

「靈なり生命なり」(ヨハネ6・63)

である。京都召団の一人ひとりが、真に十字架の「あがない(贖罪)」を体受し、聖霊の賜う「自由と愛」に生きること、キリストの光がその人の内側から輝き出るような人に変貌させられること、これが今の私の心からの願いである。日曜集会はそのためのかけがえのない場である。召団員がこれを大切にされ、共なる祈りに燃やされんことを！



「エン・クリスト」第 42 号 創世記 (第 9 回) ヤコブの旅路 (1)

1990 年 4 月発行

●ヤコブの旅立ち

本来、兄エサウに帰すべき長子の特権と父からの祝福を策略をもって奪い取った弟ヤコブを、エサウは激しく憎み、時が来れば彼を殺そうと決意していた。これを知った母リベカは心を痛め、悲劇(惨劇)を未然に防ぐためにはヤコブをエサウから遠ざけるほかないと考え、ヤコブにパダン・アラムにいるリベカの兄ラバンのもとへ身を寄せるようにとすめた。一方、イサクに対しては、エサウの妻たち(ヘト人の娘)のことで嫌な思いをしているので、ヤコブまでもがこの地の娘たちの中から妻をめとるようなことのないように何とかしてほしい、と訴えた。そこで、イサクはヤコブを呼び寄せて祝福して、命じた。

「パダン・アラムの祖父ベトエルの家に行き、伯父ラバンの娘の中から妻をめとりなさい。どうか、全能の神がお前を祝福して繁栄させ、お前を増やして多くの民の群としてくださるように。……」

ヤコブはイサクに送り出されて、パダン・アラムのラバンの所へ旅立った(創 28・1～5)。

この旅立ちはやコブにとって辛いものであったに違いない。故郷を追い立てられるようにしての旅立ちである。ラバンを頼ってゆくとしても素手である。ラバンの娘をめとろうにも、お金も何もない。昔アブラハムがイサクの嫁選びのために老僕をナホルの町につかわしたとき、らくだ十頭に高価な贈り物を多く携えて旅立たせた(創 24・10)のと比べると、大違いである。ヤコブの場合は親の後押しもない、裸一貫からの出発であり、自分の運命を一から切り拓いていかなければならないのだ。同時にそれは、神の見えない選びによって選び出されたヤコブに与え給うた神の試練、神による鍛えを意味しよう。

●ヤコブの夢(天の橋立て)

「ヤコブはベエル・シエバを立ててハランへ向かった。とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使たちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。『わ



たしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の民族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」(創 28・10～15)

まさに孤立無援の中に強力な援軍が現われた。神御自身が直か直かに語りかけ給うた。しかもその内容たるや驚くべき祝福である。意気消沈のヤコブに熱い激励の言葉！ 思いに勝る神の恵み！

「ヤコブは眠りから覚めて言った、『まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。』そして、恐れおののいて言った。『ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。』ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル(神の家)と名付けた。」(創 28・16～19)

ヤコブは孤独の中で神に出会った。彼は何も知らなかったのに、神の方から近づいて来てヤコブに声をかけて下さった。神が声をかけて下さるのはいつも人生の荒れ野(曠野)においてである。人からは棄てられ、あるいは、人との関係がまずくなつて孤独の淵に落ち込んだとき、神の方から近づいて肩に手を置き、

「元気を出すんだよ。私がついているからね。私はお前を見棄てないからね」と声をかけ、励まして下さるのである。

「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、……あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」

との、ヤコブに賜わった神の約束の言を、我ら一人ひとりに対するキリストの御言として、しかと受け取ろう。

ともあれ、右の約束の言は、これから後のヤコブの旅路を——異郷での 20 年に及ぶ苦難に満ちた生活を——支えつづけたに違いない。

●ラケルとの出会い

「ヤコブは旅をつづけて、東方の人々の土地へ行った。ふと見ると、野原に井戸があり、そのそばに羊が三つの群れになって伏していた。その井戸から羊の群れに水を飲ませることになっていたのである。……」(創 29・1～2)

ヤコブはそこに居合わせた人々からラバンのことを聞き、しかも、
「もうすぐ、娘のラケルも羊の群れを連れてやって来ます」



と聞いて、人々と語り合いつつ待つていた。やがてラケルが父の羊の群れを連れてやって来た。ヤコブはすぐに井戸の口へ近寄り、井戸を塞いでいる大きな石を転がして、その羊に水を飲ませてやった。

「ヤコブはラケルに口づけし、声をあげて泣いた」(創 29・11)

ヤコブはラケルに身の上を明かした。ラケルから聞いたラバンは急ぎヤコブを家に迎えた。

「ヤコブがラバンに事の次第をすべて話すと、ラバンは彼に言った。『お前は、

本当にわたしの骨肉の者だ。』」(創 29・13～14)

「お前は、本当にわたしの骨肉の者だ」とのラバンのあいさつは、親愛の情の表現というよりも、

「骨肉だということだけで、厄介者がよくも転がり込んできてくれたものだ」

という皮肉と半ば軽蔑の意のこめられた言葉だそう。

こうしてヤコブがひと月ばかり滞在したある日、ラバンは言った。

「お前は身内の者だからといって、ただで働くことはない。どんな報酬が欲しいか言ってみなさい」(創 29・15)

●ヤコブの結婚

「ところで、ラバンには二人の娘があり、姉の方はレア、妹の方はラケルといった。レアは優しい目をしていたが、ラケルは顔も美しく、容姿も優れていた。ヤコブはラケルを愛していたので、『下の娘のラケルをくださるなら、わたしは七年間あなたの所で働きます』と言った。ラバンは答えた。『あの娘をほかの人に嫁がせるより、お前に嫁がせる方が良い。わたしの所にいなさい』ヤコブはラケルのために七年間働いたが、彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われた。」(創 29・16～20)

私はここを読むたびに新たな感動を覚える。爽やかな気持になる。富を持たないヤコブがラケルを得るためにラバンの所で七年間働いた。「ラケルのために七年間働いた」と書かれているとおり、その労働の報酬がラケルのための結納金であつたわけだ。炎暑の下での、また酷寒の中での重い労働も(創 31・40 参照)、「彼女を愛していたので、それはほんの数日のように思われた」。愛の力であり、愛のなせる業であるが、ヤコブのこのような、純情で、情熱的で、ひたむきなところが私を惹きつけるのである。また、そうさせるだけラケルは魅力的な女性だったのだろう。

「美しくて愛らしかった」(口語訳「1955 年」)ラケル、そして、父の羊の群れを牧うたくましさも備えていたラケル、それに対してレアは、「優しい目をしていた」(口語訳では、「目が弱かった」となっている)が、何となく弱々しく存在感に乏しいような感じがする。ここで恋愛論を展開するわけではないが、異性間において、美しいもの、優れたもの、素晴らしいものを相手の中に見出し、それに惹かれ、全人格的に相手を愛するようになる、こ



のことを誰も止めることはできないし、非難することはできない。神の愛のように無差別、平等の愛を、ということとはそもそも成り立たない。恋愛、あるいは結婚の相手はただ一人なのだから。ヤコブは井戸のほとりでラケルに初めて会ったとき、「ラケルに口づけし、声をあげて泣いた」（前出）。それからもずっと、ラケルへの思いは変わらなかった。約束の七年間の年月が満ちたので、ヤコブはラバンにラケルとの結婚を申し出た。

婚礼の祝宴の夜、ラバンはラケルの代わりに姉のレアをヤコブの寝室へ連れていった。暗がりのためかヤコブはそのことに気付かず一夜を過ごした。朝になると傍らにいるのはラケルではなく、レアではないか！「何故こんなことを」となじるヤコブにラバンは平然と、

「我々のところでは妹を先に嫁がせるわけにはいかない。とにかく一週間の祝

宴をすませよう。そうすれば、妹の方もお前に嫁がせよう。だがもう七年間、

うちで働いてもらわねばならない」（創29・26、27）

全く無茶な話である。これまでの七年間の労働は、ヤコブの望んでもいないレアのための働きとみなし、ラケルと結婚するためには更に今後七年間働かねばならぬ、という。「姉を先に嫁がせねばならぬ」との慣習法（異郷から来たヤコブはそんな慣習のことは何も知らない）を持ち出し、嫌だといえはラケルとの結婚はできないよ、と揺さぶる。それなら、どうしても最初からそうと言っておいてくれないのか……。ヤコブとしてはおさまらないところだが、黙ってラバンの言うとおりにした。

こうしてヤコブは、心ならずもレアとラケルの二人の女性を正妻としてもつことになった。しかし、心はラケルの方に向かう。

「ヤコブはレアよりもラケルを愛した。そして、更にもう七年間ラバンのもと

で働いた」（創29・30）

二人の妻をもち、しかも一方をより多く愛する。このことからヤコブの結婚生活、その家庭は、夫をめぐつての二人の妻の激しい愛憎、嫉妬の嵐が渦巻くことになる。夫ヤコブはその間に板挟みとなって、右往左往している様である。この愛憎の中から、二人の妻と二人の侍女とによってヤコブの腰から、後のイスラエル十二部族（支族）の祖となるべき十二人の息子達が生まれることになるのである。となれば、すべては神の摂理というべきか、まさに神のドラマである。

●ヤコブの十二人の息子たち

ヤコブはラケルを愛した。神はレアが疎んじられている（口語訳では「きらわれている」）のを見て、彼女の胎を開かれたので、レアは順次四人の男の子を産む。最初に①ルベン——「主はわたしが疎んじられていることを耳にされ（シヤマ）……」に因む名、次に②シメオン——「主はわた」と夫はわたしに結びついて（ラベ）くれるだろう」に因む名、④ユダ——「今度こそ主をほ



めたたえ(ユダ)よう」に因む名(創 29・31～35)というように、ヤコブの子を産むことによって夫の愛を自分に向けさせようとの切なる願いが、子供のそれぞれの名にこもっている。

他方、ラケルは子供ができないので、彼女は、姉に対する嫉妬の思いを夫にぶっつけて、夫を怒らせる(創 30・1～2)。そして、レアに對抗するため、自分の召し使いのビルハを夫に与えて、彼女によって子供を得ようとする。こうしてヤコブとビルハとの間に生まれた子供が、⑤ダン——「わたしの訴えを神は正しくお裁き(ディン)になった」とラケルが言ったことに因む名、⑥ナフタリ——「姉と死に物狂いの争いをして(ニフタル)ついに勝った」と言ったことに因む名、の二人の男の子であった(創 30・3～8)。

今度はレアが自分の召し使いジルバをヤコブに与える。ジルバが男の子を産むとレアは「なんと幸運な(ガド)」と言って⑦ガドと名付けた。更に二人目の男の子を産むと「なんと幸せなこと(アシェル)か」と言って⑧アシェルと名付けた(創 30・9～13)。

夫をめぐる二人の争いはなお続く。小麦の刈り入れの頃、レアの長子ルベンが野原で見つけた恋なすびをラケルが欲しがると、レアは怒って、

「あなたは、わたしの夫を取っただけでは気がすまず、わたしの息子の恋なすびまで取ろうとする」

のかとやり返す。ラケルは、では恋なすびと交換に、今夜ヤコブをレアと共に寝かせよう、という。夕方ヤコブが野から帰つてくると、レアは彼を出迎えて言った。

「わたしは息子の恋なすびであなただけを雇ったのですから、わたしのところに入らなければなりません。」

こうしてレアは、五人目の男の子、⑨イサカルを産む。その名は、「わたしが召し使いを夫に与えたので、神はその報酬(サカル)をくださった」とレアが言ったことに因む。レアはまた身ごもって六人目の男子、⑩ゼブルンを産む。レアが「今度こそ夫はわたしを尊敬してくれる(ザバル)でしょう(口語訳では、「一緒に住むでしょう」)。夫のために六人も男の子を産んだのだから」と言つて名付けた名である(創 30・14～20)。

長い間の不妊の後、神はラケルの胎を開かれたので、彼女は身ごもって男の子を産んだ。ラケルは、「神がわたしの恥をすすいでくださった」と言った。彼女は「主がわたしにもう一人男の子を加えてくださいますように(ヨセフ)」と願っていたので、その子を、⑪ヨセフと名付けた(創 30・22～24)。

「もう一人男の子を」とのラケルの願いは後になって叶えられる。ヨセフの生まれた後、ヤコブが妻子、従者、家畜をひきつれて故郷へ帰る道すがらラケルは、⑫ベニヤミンを産む。しかし大変な難産だったのでその子を産んで彼女は息をひきとる(創 35・16～18)。

母達のそれぞれの思いのこめられた十二人の息子達。後に展開するドラマ——その中心はヨセフであるが——の中に、また神の深い御旨が隠されている。



「エン・クリスト」第43号 創世記（第10回）
ヤコブの旅路（2）——ラバンとヤコブ——

1990年7月発行

今は、30章の後半（25節以下）と31章をとりあげる。話はヤコブがラバンに暇乞いをするところから始まる。さて、

「ラケルがヨセフを産んだ頃、ヤコブはラバンに言った。『わたしを独り立ちさせて、生まれ故郷へ帰らせてください。わたしは今まで、妻を得るためにあなたのところで働いてきたのですから、妻子と共に帰らせてください。あなたのために、わたしがどんなに尽くしてきたか、よくご存じのはずです。』（創30・25～26）

実にレアのために7年、更にラケルのために7年、合せて14年もラバンのもとで働いてきた。その働きの果はすべてラバンに帰し、ヤコブのものは妻子のほかは何もない。この先ラバンのもとで働きつづけても先の見通しは全くたたない。このヤコブの気持は次の言葉によく表われている。

「わたしが来るまではわずかだった〔あなたの〕家畜が今ではこんなに多くなっています。わたしが来てからは、主があなたを祝福しておられます。しかし今のままでは、いつになったらわたしは自分の家を持つことができるでしょうか。」（創30・30）

これに対してラバンは、

「何をお前に支払えばよいのか」

と報酬に関するヤコブの希望を尋ねる。ヤコブは答えた。（実は、このヤコブの答えとその後の記述は少々ややこしい内容なので、読者は辛抱して注意深く読んでいただきたい。）

『何もくださるには及びません。ただこういう条件なら、もう一度あなたの群れを飼い、世話をいたしましょう。今日、わたしはあなたの群れを全部見回って、その中から、ぶちとまだらの羊をすべてと羊の中で黒みがかったものをすべて、それからまだらとぶちの山羊を取り出しておきますから、それをわたしの報酬にしてください。明日、あなたが来てわたしの報酬をよく調べれば、わたしの正しいことは証明されるでしょう。……』ラバンは言った。

『よろしい。お前の言うとおりにしよう。』

ところが、その日、ラバンは縞やまだらの雄山羊とぶちやまだらの雌山羊全部、つまり白いところが混じっているものの全部とそれに黒みがかった羊を



みな取り出して自分の息子たちの手に渡し、ヤコブがラバンの残りの群れを飼っている間に、自分とヤコブとの間に歩いて三日かかるほどの距離をおいた。」（創30・31～36）

当時、近東では、山羊は黒く、羊は白いのが普通で、白いところのある山羊（ぶち、まだら、縞）と黒毛の羊はまれであったという。まれだから稀少価値があつてそれだけ値打ちがあるのか、その逆なのか、牧畜にうとい私にはよくわからない。ここでは、とにかくヤコブは報酬として、このような「普通」ではない山羊、羊を要求し、ラバンがこれを承諾したという事実から出発しよう。それにしても不可解なのは次の点である。それは、右の文章（新共同訳）によれば、「今日」ヤコブがラバンの家畜の群れを見回つてその群れの中からぶちやまだらの羊、黒みがかつた羊、まだらとぶちの山羊を取り出しておき、それをヤコブの報酬分とすること、「明日」ラバンがそれを点検し確認するということがまとまった（報酬契約の成立）にもかかわらず、「ところが、その日」にラバンは該当の山羊、羊をみな自分で取り出して彼の息子たちの手に渡してしまっている。これは一体どういうことなのか、全く不可解である。そこで別の解釈が生れてくる。フランススコ会聖書研究所訳聖書では、「今日」を「今日から」、「明日」を「将来」と訳し、ヤコブの報酬分は、新たに生まれる山羊の子、羊の子というように解している。こう解すると、ラバンが「その日」にぶちやまだらの山羊、黒い羊をことごとくより分けてこれを息子たちの手に渡し、ヤコブには残りの山羊、羊、つまり黒い山羊と白い羊の群れの世話をまかせたということがそれなりに納得できる。こうしておけば、このような普通の山羊、羊からは、将来ヤコブの報酬分となるべきぶちやまだらの山羊、黒毛の羊は生れにくいだろうから。ヤコブが今後いかに働いてもごく僅かの報酬をとらせることで済むであろう。こういうずる賢い計算が働いてのことだ。では、ヤコブはこんなラバンの仕打ちにどう対抗したらよいのか。それには、ラバンにまさる「知恵」を働かす以外に途はあるまい。そしてヤコブは見事な知恵によつてラバン勝つたのである。それは次のような三つの方法によつてである（もつとも、この箇所も実に不明な点が多いのだが）。

(1)「ヤコブは、ポプラとアーモンドとプラタナスの木の若枝を取つて来て、皮をはぎ、枝に白い木肌の縞を作り、家畜の群れがやって来たときに群れの目につくように、皮をはいだ枝を水飲み場の水槽の中に入れた。そして、家畜の群れが水を飲みにやって来たとき、さかりがつくようにしたので、家畜の群れは、その枝の前で交尾して縞やぶちやまだらのものを産んだ。」（創30・37～39）

ここで「縞やぶちやまだらのものを産んだ」とあるのは山羊か羊か、両方なのか、右の文章では、ただ「家畜の群れ」とだけ書かれているのでよくわからない。フランススコ会訳では、ぶち、まだら、縞（同訳では「足首の白いもの」）はすべて山羊についての記述と解し、



「白い枝」の前で発情してみごもった黒い山羊が、ぶち、まだら、縞の子山羊を産んだと解している。次に、

(2) 「ヤコブは羊を二手に分けて、一方の群れをラバンの群れの中の縞のものと全体が黒みがかったものに向かわせた。彼は、自分の群れだけにはそうしたが、ラバンの群れにはそうしなかった。」(創 30・40)

この箇所については実に多種多様な訳し方や解釈がされて来ているようである。新共同訳が「羊を二手に分けて、一方の群れを」と訳しているのに対し、フランシスコ会訳は、「羊を別にし、その群れを」と訳している。つまり、先の(1)は山羊に関する記述(白い枝を使用)、この(2)は羊の扱いであり、白い枝は使わない。ただ発情中の白い羊を、(おそらく溝「水ぶね」を境にして)黒い山羊と対面させ、これを見ることによって黒毛の子羊を産むようにした、というのである。

(3) 「また、丈夫な羊が交尾する時期になると、ヤコブは皮をはいだ枝をいつも水ぶねの中に入れて群れの前に置き、枝のそばで交尾させたが、弱い羊のときには枝を置かなかった。そこで弱いのはラバンのものとなり、丈夫なのはヤコブのものとなった。」(創 30・41～42)

この箇所も右の訳(新共同訳)では、「丈夫な羊」「弱い羊」というように「羊」に関する記述になっているが、他の聖書(口語訳「1955年」、フランシスコ会訳)では、単に「強い群れ」「弱い群れ」として、山羊、羊のいずれとも断定していない。

このように、いろいろ不明なところがあるのだが、そして報酬契約もラバンの申し出によってその後何回も結び直されている(ヤコブは、ラバンが「わたしをだまして、わたしの報酬を10回も変えた」(創 31・7)と言っている)のだが、とにかくヤコブは右のような(1)(2)(3)の方法を駆使して自分の報酬となる家畜を増殖し、

「こうしてヤコブはますます豊かになり、多くの家畜や男女の奴隷、それらにくだやるばなどを持つようになった」(創 30・43)

のである。

こうして、ラバンの強慾な仕打ちにもかかわらず、ヤコブが財産を築いてきたとき——それは最初の報酬契約のときから6年にもなるが——、ラバンの息子たちに妬まれる。彼らが、

「ヤコブは我々の父のものを全部奪ってしまった。父のものをごまかして、あの富を築き上げたのだ」

と言っているのをヤコブは耳にした(創 31・1)。そんな時、主はヤコブに言われた。

「あなたは、あなたの故郷である先祖の土地に帰りなさい。わたしはあなたと共にいる。」(創 31・3)

そこでヤコブは妻子をよび、荷物をまとめて、



「パダン・アラムで得たすべての財産である家畜を駆り立てて、父イサクのいるカナン地方へ向かって逃げ去った」(創 31・17、21)。

さて、以上にみてきたようなラバンとヤコブの確執、狡猾なラバンこうかつに対するヤコブの態度——あるいはヤコブの処世術といつてもいい——、これを我々はどう受けとめればよいのだろうか。何をそこから汲みとればいいのか。信仰の角度からして——ということは、神様との関係において——ヤコブの生き方はどうなんだろうか。

かつては兄エサウをだまし、長子の権を奪い取ったヤコブである。しかし、故郷を遠く離れ、異境の地で、しかも強慾でずる賢いラバンのもとで、ヤコブは誠心誠意働き続けた。その 20 年の歳月の間、ヤコブを支えてきたものは何だったのか。この問を解く鍵は 31 章の中に見出されるように思われる。

ヤコブの脱走を三日後に知ったラバンは、一族を率いて七日の道のりを追いかけて行き、グレアドの山道でヤコブに追いついた。ところが、

「その夜夢の中で神は、アラム人ラバンのもとに来て言われた。

『ヤコブを一切非難せぬよう、よく心に留めておきなさい。』」(創 31・24)

この神のお告げによってラバンはヤコブの逃走を非難することができなくなり、ただ、逃走に際してヤコブの家族の誰かが、「ラバンの家の守り神の像」を盗んだことをもってヤコブを叱責した(実はラケルがひそかにその「神の像」を盗んだのだがヤコブはそのことを全く知らなかった)。ラバンはヤコブ、レア、二人の召使の天幕をくまなく探したがみつからないので最後にラケルの天幕にきた。ラケルはらくだの鞍の下に「神の像」を入れ、鞍にまたがって坐し、「わたしは今、月のものがあるので立てません」と言って動かなかったのだ、ラバンは遂に「守り神の像」を見つけたことができなかった。そこで、あらぬ盗みの嫌疑をかけられたヤコブは憤慨し、これまでのラバンの仕打ちをもふくめて一気に思いのたけを吐き出した。その中で、ラバンのもとでの自分の働きぶりを次のように語っている。

「この二十年間というものの、わたしはあなたのもとにいましたが、あなたの雌羊や雌山羊が子を産み損ねたことはありません。わたしは、あなたの群れの雄羊を食べたことはありません。野獣にかみ裂かれたものがあっても、あなたのところへ持って行かないで自分で償いました。昼であろうと夜であろうと、盗まれたものはみな弁償するようにあなたは要求しました。しかも、わたしはしばしば、昼は猛暑に夜は極寒に悩まされ、眠ることもできませんでした。この二十年間というものの、わたしはあなたの家で過ごしましたが、そのうち十四年はあなたの二人の娘のため、六年はあなたの家畜の群れのために働きました。しかも、あなたはわたしの報酬を十回も変えました。もし、わたしの父の神、アブラハムの神、イサクの畏れ敬う方がわたしの味方 نہなかったなら、あなたはきつと何も持たせずになわたしを追い出したことでは



う。神は、わたしの苦勞と悩みを目に留められ、昨夜、あなたを諭されたのです。」(創31・38～42)

この告白の中に、ヤコブを逆境の中で守り支えていたのは神様であったこと、神への信賴、神の護りの自覺をもつて20年間を貫いてきたことがよく表われている。また、神の勵しの御声によってラバンからの脱出を決意し、これを妻たちに語った次のような言葉の中にも、ヤコブに財産(家畜)を増し加えてくださったのは神であるとのヤコブの信仰がよく表われている。

「お父さん「ラバン」が、『ぶちのものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみなぶちのものを産むし、『縞のものがお前の報酬だ』と言えば、群れはみな縞のものを産んだ。神はあなたたちのお父さんの家畜を取り上げて、わたしにお与えになったのだ。」(創31・8～9)

夢の中でも神の御使いがヤコブに語りかけ、ヤコブを激勵している(創31・10～13)。これらの記述からすると、30章に記された奇抜な家畜増殖法も、ヤコブにとつては、神の啓示に由来するものであり、彼の行ったことはことごとく神の導きと護りの中でなされた事態であつた。ヤコブが財産を築き上げたのではなく、神が与え給うたのだ。人(ラバン)からではなく、神からの賜物なのであつた。人(ラバン)が拒むとき、神は与え給うたのだ。このようにみれば、ラバンのもとでのヤコブの辛苦の生活、それを耐え抜いたヤコブの忍耐は、我々に大いなる勇氣を与えてくれるではないか。

この世はしばしば「悪しき世」である。正直者が馬鹿を見ることが少なからずある現世である。いろんな駆け引きの横行する取引社会、氣むずかしい上司とのつき合い、上役からの無理な要求にも黙つて従わざるをえない職場の規律、こうした厳しい現実の中で、神を信ずる者、キリスト者は、キリスト者なるが故に一層、いろいろと辛い思いや苦しい場に立たされることが多いことであろう。しかし、主キリストはこう勵しておられる。

「汝らこの世にては艱難あり。されど雄々しかれ(勇氣を出しなさい)、我すでに世に勝てり」

と。不屈なるヤコブの行き方は、我々にそれを示してくれているのではあるまいか、窮すれば通ずる。必要な時に、必要な知恵と力が与えられ、道が開かれるのだ。力が上よりやってくるのだ。

「この故に神の能力ある御手の下に己を卑うせよ、さらば時に及びて神なんじらを高うし給わん。又もろもろの心勞を神に委ねよ、神なんじらの為に慮ばかり給えばなり。」(ペテロ前書5・6～7)

アーメン。



「エン・クリスト」44 号

日常生活の中の福音

——1990 年夏期福音特別集会 第 1 回講筵——

1990 年 8 月 10 日夜 (御殿場 Y M C A 東山荘)

今晩はここに 30 名が集っております。思いがけない台風の通過にぶつかって、いろいろ支障が出ましたね。私たち京都勢も、普通なら京都から三島まで 3 時間のところを、待時間も含めて 6 時間以上かかりました。松井・増田両兄には、当地での御準備万般大変お世話になりました。大阪の兄姉たちは未だ到着されず気がかりですが、すべて主の聖手に委ねます。

今日の主題は、日常生活の中の信仰、私たちにとっては、「信仰」というよりも「福音」という方がピッタリとしますから、「日常生活の中の福音」ということです。「福音」というものは何か特別にお膳立てされたもの、神棚に祭り上げられたものではない。普通の日常生活の中に切り込んで来ている事態である。何が起こるかわからない、その中で働くのが「福音」でありキリストである。だから何が来ても驚かない、動じない。「大丈夫だよ」と主キリストはいつも身近にあって御声をかけていて下さるのです。ガリラヤ湖上、暴風の中で舟板を枕に眠っておられたイエスの姿、全托の姿！この主様の中に自分を投げ入れよう。われわれは四六時中、主の御手の中に在る。主キリストは日常生活のただ中にいらつしやる。ゆかた着でくつろいでいる時にも、労働着で汗にまみれている時にも、そのどちらにもいらつしやる。主イエスは日常が好きだ。人里離れたところや路傍でのお話、イエスには構えたところがない。日常生活の中で語っておられる。それが福音書に記されているイエスのお姿である。もちろん人知れず深く父なる御神の懷に入って祈っておられた時には、朝まだき暗きうちに起き出でて、山に入って祈ったりもなさった。このようなイエスのお姿が慕わしい。

今日は台風に見舞われたが、思い出すのは使徒行伝 27 章 9 節からのパウロを護送しての航海の記事です。パウロが止めるのも聞き入れず、船長や船主の言を重んじて百卒長は航海に乗り出したのですが、ユーラクロンという暴風に見舞われ、一同生きた心地もなく 14 日もの間、食事もとらぬ状態が続いた程でしたが、パウロには神の使が夜、パウロの傍らに立って神の言を賜い、一同の身の安全を保証し給うた。そこでパウロは御言に従って一同を励まし力づけ、人々を助けたのです。囚人として護送されているパウロが一同にとつてどんなに頼もしく輝いて見えたことでしょう。主に在って生きる者の姿、エン・クリストの現実とはこのようなものです。パウロは、生きるにも死ぬるにもただ主キリストの聖



名の崇められんことを！ との祈りに生き抜いたのです。主に全托していけば主は最善を為し給う。明日のことを思い煩う必要はないのです。

集会にしてもそうです。「主よ語り給え、僕聴く」の心根です。京都をはじめキリストの各召団は、普通の人間が聖名に在って立たしめられ、各々職業を持ちながら集会の責任を担っている、そういう代表者（リーダー）が牧している群れです。素人によって牧される素人達の集団です。大切なことは主に全托していくことです。主キリストが集会の「主」であり導き手であり給う。リーダーが自分の立派さで人を引っ張っていくのではない。リーダーは主の僕に徹していくこと。いつも主様の御前に、十字架の主様の御前に平れ伏し、祈っていくこと、そのみです。そういう私たちにとって、とても参考になり、指針となり、励ましとなるのが使徒行伝20章におけるパウロの姿、パウロの言です。17節から38節までをご覧下さい。エペソの教会の長老たちをミレトに招き、そこで別れのあいさつをしたパウロの言は切々と胸に迫ります。

「三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを憶えよ。われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。」（使徒行伝 20・31～32）

「主および其の恵みの御言」にあなたがたを委ねる、と言っている。人格たる主様、その語られし御言、すなわち、主と御言とは一如一体である。この主と其の御言こそ、あなた方を全うするのであると。あなた方の立派さに委ねるとは言わなかった。確固たる制度に委ねるとも言わなかった。主御自身とその御言なのである。これをしっかりと心に刻み込もう。

集会（エクレシヤ、召団）は主キリストのものであり、リーダーは主および集会への奉仕者である。集会員各自は主のエクレシヤ（召団）の一員である。この一人一人に対して自覚を促しているのがコリント前書12章であり、ロマ書12章である。賜物（カリスマ）は種々様々だが聖霊は一つである。聖霊は御人格である。その本質は愛である。この愛のみは万人に共通の賜物、誰でもがいただくことができる。いやいただかなければならない。それ以外の賜物——異言、預言、いやし、等々——はエクレシヤを建て上げるために主の御思いのままに分かち与えられるもの、世に向かつてキリストを証していくにあたっての武器である。大切なことは

「体（エクレシヤ）のうちに分争なく、肢々一致して互いに相顧みん」
ことである。

「もし一つの肢苦しめば、もろもろの肢ともに苦しみ、一つの肢尊ばれば、もろもろの肢ともに喜ぶなり。すなわち、汝らはキリストの体にして各自その肢なり」（コリント前書12・25～27）



との自覚であります。私たちがいただいたのは主キリスト直結の信仰。十字架を通して主キリストに直結した。同時に、私たちは深く他を顧み、他の人の為に祈る。他人の為に執り成し祈ることを通して、また自分自身も恵まれる。

今日は皆さんに「普段着信仰」という事を提言したい。普段着のままで、あるがままの自分の姿で、主に直結していいということです。我々には立派な教会堂や特別の祭壇があるわけではない。リーダーは素人である。そういう素人集団であるキリスト召団なのだ。しかし、常時、主の中に在る。キリストの中に「生き、動き、在る」。生命に溢れ、愛に溢れた召団でありたい。二、三人相集えば自然に祈りが始まる。会うことが嬉しい。祈らないではいられない。感謝と讃美の祈りをしないではいられない、そんな群れでありたい。その土台はどこまでも十字架。十字架を深く受け取ろう。旧き我は十字架において根底から贖いとられている。十字架の「場」で主は私たち一人一人に出会って下さる。

「我、汝を愛しむ。我が愛に居れ」

と。最後をお願いしたいのは、己れを主に献げていただきたいという事。自分自身を主に献げる事。これが主の愛に應える道です。「献げる」とは御旨のままに生きるという事、御旨ならば、御意ならば、どこへでも参ります、との心根。生くるにも死ぬるにも、ただ主の栄光の顕われんことを、と祈ってゆくことです。



「エン・クリスト」44 号

愛によりて働く信仰

——1990 年夏期福音集会 第 2 回講筵——

1990 年 8 月 11 日 午前 (御殿場 Y M C A 東山荘)

昨夜は「日常生活の中の福音」ということで話しました。日常生活の中でいつも私を慰め力づけて下さる御言は、

「^{すべ}凡て労する者・重荷を負う者、われに^{きた}来れ、われ汝らを休ません」(マタイ福音書 11・28)

との主の御言です。我々はみな何らかの職業に携わっています。あるいはまた、家庭の主婦として家事や育児に携わり、その他いろいろの働きをしています。これらの日常の営みの中で主は私たち一人一人を顧み、祝福し、慰め、また励まして下さるのです。いわゆる「聖」と「俗」の分離ではないのです。ただ、やはり我々には、この世の仕事において、この世にあつての営みにおいて、それぞれに重荷があり、労苦があります。御言に聴き、御言につかえ、主に祈るという生活とこの世での営みとの間にギャップを覚え、二足わらじを履いているとの感を強くすることがあります。二つの生活の間で板挟みになることがあります。そんな私達に、先の御言

「凡て労する者・重荷を負う者、われに来れ、われ汝らを休ません」

は、慰めを与え、休息を与え、力を与え、勇気を賜います。主イエスもまた私たちと同じようにこの世にあつて労苦され、人の弱さを知り給うお方だからです。

「我は柔和にして心^{ひく}卑ければ、我が軛^{くびき}を負いて我に学べ、さらば^{たまひ}靈魂に^{やすみ}休息を得ん。わが軛^{やす}は易く、わが荷^{かろ}は軽ければなり」(マタイ 11・29～30)

すべてを主様に委ねていけば道が開かれます。二足わらじがいつしか二足でなくなり、主は、

「二つのものを一つとなし」

給うお方です(エペソ書 2・14～15 参照)。

さて、今日の主題「愛によって働く信仰」に関わる聖書の箇所は、ロマ書 12 章～14 章、コリント前書 12 章、同 9 章、ガラテヤ書 5 章などです。ことにロマ書 12 章は、日常生活の福音の指針ともいうべきもので、集会(教会)生活において、家庭生活において、また職業生活においての私たちの生活に対する実にゆきとどいたすすめが語られています。一語一語とても含蓄が深いです。パウロはまず

「己が身を神の悦びたもう^{きよ}潔き^{そなへもの}活ける供物として献げよ、これ靈の祭なり」(ロ



マ書12・1)

と呼びかけています。信仰とは、礼拝とは、修行でも知識でもない。まず己れ自身を主に献げることだ、というのです。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真^{まこと}とをもて拝すべきなり」(ヨハネ福音書 4・24)

とキリストは言われましたが、「真の礼拝」「霊と真をもつてする礼拝」とは、自己自身を「潔き活ける供物として献げ」ることなのです。それからパウロは、

「思うべき所を超えて自己を高しとすな」(ロマ書12・3)

といつて高慢を戒め、それぞれがいただいている賜物をもつて互いに仕えていくようにと勧めます。

「兄弟の愛をもて互いに愛^{いとく}しみ、礼儀をもて相譲り……」(ロマ書12・10)

「喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共に泣け。相互に心を同じうし、高ぶ^{ひく}りたる思をなさず、反つて卑^{ひく}きに附け。なんじら己^きを聴^{きこ}しとすな」(ロマ12・15～16)

と実にねんごろです。こういう言の一つ一つを私たちは大切にしたいと思います。

「悪をもて悪に報いず、凡ての人に対して善き^{はか}ことを図^{はか}り、為し得る限り力^{つと}めて凡ての人と相和らげ」(ロマ書12・17～18)

と。これはもう完全に聖霊の愛の力なくしては為し得ぬところです。「為し得る限り力^{つと}めて」と言つてますね。努力せよ、ということです。祈りをもつて努力せよ、と。努力なくしては何事も成らないです。身体を鍛練することも、勉強することも、愛することも、みな「努力」を要します。しかし、修練していくと努力が努力でなくなってしまう。楽しくなってくる。

「忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず」(ロマ書5・4)

とあるのと通じます。しかも自分では、何も特別のことをしていません、との無為の自覚です。主が為さしめて下さったのです、と主を讃え、主に感謝していくのです。

さて、パウロがどんなに「愛」を重んじているか。

「汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は律法を全うするなり」

と言い、どんな誠命・律法も、

「おのれを愛する如く隣人を愛すべし」

との一言にみなこもっているという。

「愛は隣人を害しない、この故に愛は律法の完全である」(ロマ書13・8～10)

と言っています

「おのれの如く隣^{となり}を愛する」愛、全き愛の内実は、コリント前書13章の「愛の讃歌」にう



たわれている通りです。

「愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は驕らず、非礼を行わず、己の利を求めず、憤おらず、人の悪を念わず、不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事耐うるなり」(コリント前書13・4～7)

と。

このような「愛」の一つの具体的な例としてパウロはロマ書14章(コリント前書8章も同じ)で食物の問題をとり上げて論じています。当時はまだ、すべての食物が神の前に潔いものとは思われていなかった。例えば偶像神に供えられた肉はけがれたものと見られていた。だから市場で売っている肉がもしかして偶像神に献げられたものだったら、それを食することは己が身を汚すことであり、罪であると考えた人達がいきました。パウロ自身は、どんな食物もそれ自体としては潔いものと信じていました。ただ潔くないと思う人にとってのみ潔くないだけだ、と。しかし、だからといって、潔くないと信じ、その食物を食することのできないでいる人を、「信仰が弱い」とか、「無知なる人だ」といって、審いたり軽蔑したりすることがあつてはならないと、いわゆる信仰の強い人を戒めているのです。いや、互いに審き合うことがあつてはならない、と。どちらの人も神の僕、キリストの僕ではないか。キリストが主だ。主に代わつてその僕を審くなどということとはあつてはならぬ、と。

「彼が立つても倒るるも其の主人に由れり。彼は必ず立てられん、主は能く之を立たせ給うべし」

と。たとえ客観的には自分が正しかろうとも、その正しきの故をもって他者を審いてはならない、また、躓かせてはならない、と。だから、肉を食し、葡萄酒を飲むことが兄弟を躓かせるようなら、自分はこれを差し控えよう、とパウロは言うのです。このパウロの態度、パウロの言は深く味わうべきものです。これは妥協ではありません。思いやりなのです。真の寛容の心です。コリント前書9章では、自分は凡ての人に対して自主の者であるけれども、更に多くの人を得るために、自ら進んで凡ての人の奴隷となつた、と言っています。ユダヤ人にはユダヤ人のごとく、異邦人には異邦人のごとく、弱き者には弱き者のようになつた、と。

「これ如何にもして幾ばくかの人を救はんためなり」

と。パウロの実存は全くキリストの心を心としています。キリストに献げることと、隣人を救い上げることが一つであつたのです。

